
MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 8 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 8 >

【Nコード】

N 1 2 8 3 M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

かつて。

この新宿には二人の『帝王』がいた。『闇』の一族を統べる吸血鬼一族の、その長である彼らは、『光』と『闇』とを統べる『唯一無二』の『帝王』の座をめぐり闘った――この新宿^{まち}で。

そして――一人は永久とも思える深い眠りにつき――一人はこの現世^{うつしよ}へ留^{とど}まった。

陽の光を、『昼の住人』へと明け渡し、『夜』の闇を駆け抜ける――。

決して越えてはならない、『光』と『闇』の境界線を越えようとする者たちを、『帝王』の名にかけてその手で葬るために。

満開の宵桜の下で会った青年。その謎の青年『和人』をめぐって様々な事件が起きる。殺された秀の友人 貴史の死の謎を明かすのも『和人』。

和人の後を追って新宿に足を踏み入れた秀を待ちうけていたものは？

『WOLF MEET VAMPIRE』＜8＞（前書き）

まじめに『今のところは』更新しています（――¥）。。。。
下書きがあつて、良かった。みなさん気が向いたらカキコ願います。
今後の小説のネタにしたいと思ってます（――）ノペコリ

『WOLF MEET VAMPIRE』< 8 >

< 8 >

女性は、秀に先だつて通りを歩き始めた。

幾つもの角を曲がり、幾つもの店の前を通り過ぎていく。

やがて――どこからか立ち込めて来た白い霧が、2人の周囲に満ち始めていた。

「・・・何だ、ここは・・・」

新宿の真ん中で――文字通り駅からそう離れていないであろうこの場所で、霧が発生するなんて・・・。

秀は、いつの間にか方向感覚を失っていた。

「ねえ、君。一体どこまで行くんだ。」

秀は、前を歩く女性の後姿に声をかけた。

確かに左右の建物は、秀の見慣れた新宿の物である――が、しかし、今彼がいる『空間』は普段とは全く違う感覚であつた。

まるで、見えないガラスの向こうに新宿の街並みが配列されているかのように。

「何処まで、連れて行く気だ――お前。」

秀は、両手をEDWINのGパンのポケットに突っ込んで立ち止まつた。

その気配に、彼女も立ち止まる。

「和人の所に連れて行ってあげるって言つたでしょ、坊や。」

ゆっくりと・・・金髪を揺らして振り返る。

「でも、その『血』を、私たちが十分に味わつた後でね、『屍』となつてから。」

「な・・・!」

秀が思わず一步身を引いた時――

左右の店の扉が次々と開かれ、中から出て来た人々が無言で彼を

取り囲んだ。

スーツ姿の男性。若いカップル。どこかのバーの店長風の男。ホステスの女性。

だが、一見『普通』に見える彼らの口元には、鋭く光る2本の八重歯が覗いていた。

赤く輝く瞳で、秀を見つめては微笑む――。

「久しぶりの上玉じゃないか、カレン。」

マスターが、舌舐めずりをして呟く。

「本当よ、先刻から濃厚な『血』の匂いがプンプンして、思わず嘔みつきそうになっちゃった。」

「こらこら、一口目は俺からだって約束しただろ。」

若いカップルの奇妙な会話。

「一体、何だっというんだよ、お前らは！」

秀は怒りを露わにして、自分を導いた女性に向かって叫んだ。「

先刻から黙って聞いてりや、訳のわからん事をぐだぐだと！お前ら自分たちが『吸血鬼』^{ヴァンパイア}とでも言いたいのかよっ！」

「あら、判っちゃった？」

彼女は悪びれもせずと言った。「ごめんね、坊や。これも『運命』だと思っただけだ。」

それから、一層、その犬歯を鋭くむき出しにし、「ただの人だつたら一族に加えてあげても良かったけど、和人の『側』^{なかま}であるんだつたら――」

刹那。

その身が宙に舞う。

「許せない！八つ裂きにしてくれるっ！」

バツ・・・！

彼女の伸びた爪が、秀の体を引き裂く前に、彼の体も中空に舞っていた。

「何！たかが人間ごときに――」

「お生憎さま。俺も多少は『普通の人』とは違うらしい。」

吸血鬼^{ヴァンパイア}が作る円陣から、3M程離れた場所に着地し、「お前さんたち程じゃないけど。」

「能書きを・・・！」

金髪の女性を先頭に、群れは一陣の風となつて秀を襲った。「大人しくおし！あの男のように！」

「あの男！？」

一人目の攻撃を、右拳を振りかざしてかわし、「じゃあ、貴史を殺った（やった）のもお前らの仕業か！」

「和人を尋ねて来た、あいつが悪いのさ！」

いつの間にか、秀の背後にまわったスーツ姿の男性は、彼を背中から羽交い絞めにした。

「和人は我らの宿敵――九桜様を倒した、憎んでも余りある奴
！」

「奴が『帝王』だと？」

やっと羽交い絞めからすり抜けた秀を待ち構えた様に、警察官の制服を着た男は棍棒で彼の頭を後ろから殴りつけた。

「つつ・・・！」

一瞬、目の前が闇と化す――

「あんな『人間』どもに侵された奴、我ら闇の一族の帝王に、相応しくないわ！」

その男の声が、誰のものかも判らない。

倒れかかった秀の体は誰かの力によつて無理矢理引き起こされ、軽々と円陣の中央へと放り投げられた。

「やめ・・・！」

彼の叫びが達する前に、幾つもの鋭い爪が彼の体を引き裂く――。

円陣の向こうに投げ出された時には、引き裂かれたシャツは鮮血に染まっていた。

「・・・！・・・」

朦朧とする意識を気力でかるうじて保ちながらも、バランスを失った体は、路上にひれ伏した。

「大人しくしていれば、こんな目に会わずに済んだのに。」

秀の右腕を掴み、秀を導いた女性は軽々とその体を引きずり起こした。

「貴様・・・！」

体中を駆け抜ける激しい痛みに耐えながら、彼は血の滲む下唇を噛み締めた。

「いい男なものにもつたいない。」

立て膝の、秀の腰に細い腕を回し、一方の手で顎を斜めに押し上げる。

「やめろっ・・・！」

秀は喉元に近づく甘い吐息に、必死に抵抗した・・・しかし、女性とは思えぬ程のその力は、秀を決して呪縛から逃そうとはしない。「せめて・・・サロメのように首から上は永遠に私の懷で抱いてあげる。」

2人を取り囲む、無数の薄笑い・・・

固く目を閉じた秀が、首筋に彼女の牙の冷たさを感じた時・・・
天空の月が瞬いた。

「やめろっ！俺に触るなっ！！」

バツ・・・！

「キャー！！」

「うわー！！」

異世界の住人たちは、突如舞い起こった『神嵐』に散り散りに吹き飛ばされた。

白い霧が、大きく揺れる。

立ち上がる土煙の中で、やっと身を起こした女性は、前方にその

『主』の姿を見留めた。

全身を鮮血に染めながらも悠然と両足で大地を踏みしめ、漆黒の髪に夜風をまとわず雄々しいその姿は、先刻まで自分が手中に納めていた者と同じ人物とは思えない。

唯、違うのは――赤く、燃える様な両眼と、自分たちのものは異なつた鋭さを持つ口元の2本の犬歯。

「お前は――！何者！？」

彼女はゆっくりと身を起こした。

傷ついた吸血鬼たちも、彼女に続く。

「倒してやるうぜ、カレン。所詮、多勢に無勢だ！」

「！駄目、早まっては、彼は――」

彼女の制しを振り切つて若者は秀に挑みがかつた。

が、しかし、その牙が秀の喉元に達する前に、逆に秀の牙が一瞬の間に彼の首を捕えていた。

悲鳴を上げる事さえ許さずに――秀は彼の首を噛み切つた。

「誰も、俺の体に触らせないぜ――」

秀は、赤い瞳を月光下で光らせて笑つた。

「みんな、逃げて！」

カレンと呼ばれた女性は、恐怖に顔を歪めつつ天空に飛翔した。

吸血鬼の跳躍は、一瞬のうちに星空へと達する。

しかし、飛翔しきれなかつた幾人かは『死』を自覚する間もなく、秀の牙に引き裂かれて地上に四散した。

鈍い音をたてて『屍』が転がる――

秀は満足げに口元の血を舐め、片膝をついて着地した。

「物足りねえな――人間でも『狩り』に行くか。」

と、呟き立ちあがつた時。

屍の向こうで、霧に紛れて立つ人影があつた。

「もう一人、残つてたか――吸血鬼野郎っ！」

右足をバネにし、秀は再び天空めがけて飛翔した。

同時に、彼に挑むかのように、その人影も夜空へと舞いあがつた。

がつ・・・！

鋭い犬歯を、相手の二の腕に食い込ませる、秀。

遙か地上に向けて、幾筋かの紅の線が滴り落ちる・・・

「もう、十分だろ、秀。」

『彼』は、静かに言った。

「！・・・」

秀の中で・・・『秀』が目覚めます。

もう一度聞きたかった、その声。

ずっと探していた、その姿・・・

「・・・」

秀は、ゆっくりと彼の腕から牙を抜いた。

「和人・・・探してたんだぞ、ずっと。」

自分の名を呼ぶ秀に、和人は何も言わず微笑んだ。

この一カ月の空白を埋めるのに十分過ぎる程の澄んだ微笑みで・・・

・

それを確かめ安心したかのように、秀は静かに目を閉じ、力無く地上へと舞い落ちようとした。

月が・・・西の空にポジションを移す。

目を閉じ切る直前。

大きく差し伸べられた秀の右手を、和人の左手はしっかりと掴んでいた。

『WOLF MEET VAMPIRE』＜8＞（後書き）

続きを楽しみにしていただけたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1283m/>

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 < 8 >

2010年10月11日16時36分発行